

George Eliot の修業時代

The Westminster Review 編集を中心に

富田成子

I

『ケンブリッジ版イギリス文学書誌』(第3巻)等から推察すると、19世紀英国には約4,000人の女流作家がいたという。当時、著述業は家庭教師と並んで女性の数少ない職業だったため、前世紀半ば以降の読者層の激増を背景に、多くの女流作家が輩出している。だが、芸術家として大成し歴史に名を残したのは、Jane Austen, Charlotte Brontë, Mrs Gaskell, George Eliot 等、ごく僅かしかいない。¹ 勿論、大多数の女流作家が自滅したのは、評論 ‘Silly Novels by Lady Novelists’ での Eliot の辛辣な指摘からも容易に想像できるように、彼女たちの作品のレベルの低さが主因である。しかし、優れた才能・資質・不断的努力にもかかわらず、劣悪な環境に阻まれ埋もれてしまった作家も多くいた。才能ある男性作家でも出版業界の複雑な機構に押しつぶされ、開花することなく無名のうちに多くが消えている。ましてや、執筆料のひどい男女差、驚くほど安い版權で搾取する出版業者等、女流作家を取り巻く環境は厳しく、貧困に追われ生活苦のあまり、乱作によって能力を消耗し文壇から消えていった数々の例は、Nigel Cross の *The Common Writer: Life in Nineteenth-Century Grub Street* 第5章に詳しい。

夥しい数の作家が落後していった悲惨な現実の中で、Nuneaton のような片田舎に生まれ、およそ文壇とは無縁の環境に育った Eliot が、Strauss, Feurbach による当時の最新思想を英国人として初めて翻訳したり、伝統ある季刊誌 *The Westminster Review* (以下、WR と略記) の事実上の編集長を勤めた後、活発な評論活動を経て、優れた小説を次々と世に出し、当時の文壇の最高峰に達することが出来たのは、奇跡と言ってもよいのではないだろうか。あの制約の多い時代に、ごく一握りの例外として生き残り、英国小説の伝統の要に位置する作家となり得た背後には、傑出した才能を導き、育て、支えた幸運な要因があったに違いない。

George Eliot の生涯を辿っていく時、自己実現を求めて道を模索する過程の要所要所で、まるで偶然のように巡り合い、より広い世界へと導いてくれた人脈に恵まれた僥倖を感じざるを得ない。本論では、本格的な執筆活動を開始する以前の、言わば彼女の修業時代(1841-54年)における Charles Bray と John Chapman の功績について論じ、特に WR での編集者時代(1852-54年)に焦点を当て、この時期の修業が彼女を如何に育てあげたか、を考察したい。

II

Cross は、多くの女流作家が芸術家として大成出来なかったのは、教育の欠如・機会の欠如・地位や財産の欠如による文学的視野の狭さ²に原因を見ている。Eliot の場合、それらの点については比較的恵まれているが、中でも機会 文壇登場へのチャンスをつくった人脈 における幸運を特筆すべきだろう。

視野拡大という点から見た場合、彼女の生涯を通じて最も画期的に寄与したのは、1841年から始まる Bray との交流である。彼との出会いが無ければ、おそらく文筆活動への道は開かれなかったし、才能も日の目を見なかったのではないだろうか。

George Eliot に関しての Bray の功績として、先ず広大な世界の紹介を挙げたい。知的教化だけでなく、文字どおり世界の広さ開眼へと導く mentor 的役割である。彼との交流により、Mary Ann Evans(George Eliot の本名)の前に、Nuneaton での家族中心の狭い共同体から飛躍的に広い世界が開かれることになる。家督を兄に譲った父と共に、Coventry に転居した Mary Ann は、隣人の紹介により Bray を中心とする急進的自由思想家グループと知り合い、近代科学の見地より聖書や宗教の原典を客観的に解釈する高等批評に初めて触れて、強く感化される。急進的な *Coventry Herald and Observer* 紙を主宰し、Robert Owen の主張する「平等と利益の共有」に賛同して、労働者のクラブや 幼児学校 の設立 など革新的な発想を次々実行する彼には一種のカリスマ的魅力があったのではないだろうか。

Herbert Spencer, Harriet Martineau, J. A. Froude, George Combe, R. W. Emerson 等 多くの開明的な知己が彼のもとを訪れ、談論の場を創っていた。晴れた日には、彼の私邸の庭でアカシアの木の下に熊の毛皮を敷き、議論の花を咲かせたという。そこに集うのは、Bray の言う 'a little cracked'

な仲間たち。³ の中には後年彼女が編集に携わる WR の常連寄稿者も多く、circle の一員となることで、ごく自然にジャーナリストや文人たちに触発されていったと思われる。教育熱心な両親のもとで可能な限りの教育を受け、個人では入手できないほど本の価格が高かった時代に、近隣の名士たちの library を利用させてもらい広範な読書に励んだり、ドイツ語、フランス語、イタリア語の個人指導を受けるなど、環境を最大限に活用し、知識と教養を積み重ねてはいるものの、まだ発展途上にある 22 歳という時期に、最新の思想を議論し、既成概念を打破するような刺激的で自由な雰囲気の中の Bray circle の中で、哲学の基礎や思考の様式を含めた orientation を受けたことは意義深い。

特に Bray—Hennell の血脈が彼女に与えた影響は公私共に大きい。Bray とその妻 Cara、Cara の姉 Sara、兄 Charles Hennell、彼の妻 Rufa は、Mary Ann と同世代であり、たちまち意気投合し、強い友情で結ばれる。信仰への懐疑を表明すると社会的に追放されかねなかった当時に、彼らは聖書の矛盾を攻撃して伝統宗教を放棄し、キリスト教の本質を追求した懐疑主義者だった。リボン製造業を営みながら独学で *The Philosophy of Necessity* (1841) など 3 冊の著書を書いた Bray、15 歳で実業界に入りながら独学で *An Inquiry concerning the Origin of Christianity* (1838) を書き上げた Hennell、20 歳から家庭教師として働きつつ神学研究に打ち込み、*Her Thoughts in Aid of Faith* (1860) など 3 冊の著作のある Sara、ドイツ高等批評に造詣の深い Rufa。特に、前記の Hennell の著書は Mary Ann の宗教観を決定的に変えてしまう。熱烈で鋭い知的探求者の彼らは、Mary Ann にとって、師というより互いに切磋琢磨する良き仲間だったのではないだろうか。Bray、Cara、Sara との親しい交際は、旅行・舞踏会・観劇・観光等、私生活にも及ぶ。Wales への旅、Strauss 翻訳終了後の Windermere 湖への旅、父が亡くなった直後の欧州への旅、と共に出掛けた旅は枚挙にいとまがなく、その経験は彼女の視野を広げたに違いない。

だが、彼らとの交流がもたらした最も特筆すべき恩恵は、降って湧いたように Mary Ann のもとに舞い込んだ David Friedrich Strauss 著、*Das Leben Jesu* (1840) の翻訳の仕事であろう。英語版を切望した急進派の政治家、Joseph Parkes が先ず白羽の矢を立てたのは Hennell だった。しかし、彼は妹 Sara にその仕事を任せる。ところが、大部で難解すぎるとの理由で辞退され、次いで、Miss Brabant (後の Hennell の妻、Rufa) が取り組むが、結婚のため、257 頁まで訳したところで挫折。Mary Ann なら立派に完成

させるだろう、と確信する友人たちから引き継いだという経緯がある。原著は 1500 頁にも及ぶ大著で、ヘブライ語・ギリシア語・ラテン語の引用が頻出し、内容的にも密度の高いものだった。*The George Eliot Letters*(以下、*Letters* と略記)によれば、翻訳開始が 1844 年 1 月、1 日 6 頁をノルマに、1 頁に 1~2 時間かけて、早朝から深夜まで作業に没頭している。入り組んだ複雑な構文、冗長でうんざりするような内容 迷路のように難解な Strauss の世界との格闘は 2 年に及ぶ。訳業にあたって Mary Ann が第一に心がけたのは正確さであり、用語一つに至るまで熟慮し推敲を重ねている。こうして、「もう二度と翻訳はごめんだわ」(*Letters*, I.176)、「最後の 100 頁には全く興味が持てなかった」(*Letters*, I. 207)と、悲鳴を挙げつつも忍耐を貫き、1846 年 4 月、完成させている。周囲の友人全てが断念した難業を全うしたその執念は並みではない。Bray group に入って 5 年目、才を競う仲間達の中で Mary Ann はいち早く頭角を現わしている。完成後直ちに、Strauss に原稿の一部を送り、出版の正式認可を求める。翻訳の正確さを高く評価した彼からは、ラテン語による序文を贈られ、依頼者 Parkes から提供された 300 ポンドをもとに、同年 6 月 15 日、*The Life of Jesus, Critically Examined*(以下、*Life of Jesus* と略記)は翻訳者名を記さぬまま 3 巻本として出版され、概ね好評を博した。翻訳開始当初、ドイツ語はさほど堪能ではなかったが、作業を通して飛躍的に上達したらしい。ひたむきな努力と高い教養がこの快挙の原動力であることには違いないが、文壇とは無縁の彼女が歴史に残る名著の翻訳という大きな仕事に遭遇したのは、Bray との交流の賜以外の何ものでもない。

この翻訳の好評から WR への道が開かれる。*The Life of Jesus* の出版者が Chapman であったという縁で 1850 年、Robert William Mackay の *Progress of the Intellect* の書評を依頼され WR に発表。1851 年、Chapman が自由主義的な季刊誌 WR の社権を買い、経営に乗り出すと、Marian(この頃改名している)は彼からの依頼を受け、ロンドンに移転し、編集者として本格的にジャーナリズムの世界に入ることになる。勿論基本的には、彼女の手になる翻訳・評論が高く評価され、才能を認められた故だが、当時女性にとって容易ではなかったジャーナリズムへの道が極めてスムーズに開かれたのは、Bray—Chapman という人脈の連鎖によることは明らかであろう。このように、Eliot が殆どの女流作家に比べて非常に幸運だったのは、人生の門出という節目で Bray と巡り合い、自由な気運に満ちた彼の circle で思想と表現の training を受けたことである。

更に、女性が地方からロンドンに出て働くこと自体、至難であった時代に、Marian には現代女性にも匹敵するような身軽さで活動出来る自由があった点も無視出来ない。既に父は亡く、遺産として 2000 ポンドの信託財産と伯母 Evarard からの遺産贈与を合せると年 120 ポンド⁴ の確実な収入が彼女にはあった。編集者時代は無給だったが、boarding house を経営していた Chapman から部屋と食事は提供されている。19 世紀半ば、中産階級の平均年収は 150 ~ 1000 ポンドの幅があるが、中でも聖職者・弁護士といったいわゆる「中流中産階級」の年収が 300 ~ 800 ポンドであったこと⁵ を考えると、年 120 ポンドの定収入は、食住を保証された女一人が生きていくには、贅沢をしなければ何とか自活可能な額と思われる。多くの女流作家が一家の稼ぎ手として乱作し、才能を消耗して自滅したのに対し、彼女の場合は、これによって生活の心配なく仕事に専心出来たのではないだろうか。両親が死亡していたため就職を反対したり邪魔する者もなく、自立可能な経済力を糧に、Marian は今や世界の教養文化の中心に身を置くことになったのである。彼女の後期小説には、Dorothea を筆頭に、家父長の欠落と自由になる資産の所有という当時としては破格に束縛の少ない状況のもとで自由に aspiration を追求するヒロインが多く登場するが、自分の意志で自由に道を選択出来た若き日の Marian の投影が感じられる。

当時は活字メディアの拡大と印刷・製本・製紙技術の発達によって、出版業界は繁栄し熾烈な競争にあった。定期刊行物の黄金時代と言われ、季刊誌・月刊誌・週刊誌が読者獲得に向けてしのぎを削っている。⁶ 季刊誌は、*Edinburgh, Quarterly, Athenaeum, WR* の 4 誌が major で、各誌とも其々の特色を活かし、魅力的な編集方針のため創意を尽くしているが、その生き馬の目を抜くような世界へずぶの素人である彼女が飛び込んだのだった。こうして、Marian は一気に当時の知の最先端に立つことになる。Chapman と Marian の作戦は、知的レベルの高い知識人層に照準を当て、欧州(独・仏)での重要な思想・最新の出来事を網羅して、立ち後れた感のある英国に紹介するという啓蒙の方針であった。1852 年 1 月発行の *WR, NEW SERIES, VOL. I* に復刊趣意書 (Prospectus) を掲げ、真理の普及のためには何ものも恐れず、真摯な思想の発展と指導に向けて力を尽くし、*WR* を時代の最も有能かつ独立した精神の機関とすべく努めるという高い目標を宣言している。

THE NEWLY-appointed Editors will endeavour to confirm and extend the

influence of the *Review* as an instrument for the development and guidance of earnest thought on Politics, Social Philosophy, Religion, and General Literature; and to this end they will seek to render it the organ of the most able and independent minds of the day.⁷

男性優位のこの業界に入るに際して、編集者として彼女の名前を公表しない方が良いと提案したのは Marian の方からだった。当時の因習を考慮してのことだろうが、そのような条件でもなお、創立 1824 年の伝統を誇る WR の復刊という大事業に自身が主力となって参与することに Marian は強い誇りを感じたに違いない。

「女ゆえに善い行いもできないので、せめてそれに近いものを絶えず求めるのです」。Eliot は *Middlemarch* の 1 章のモットーで、『乙女の悲劇』の文句を引用し、社会に役立ちたいとの熱望を抱きながら、対象が見つからず葛藤する結婚前の Dorothea の心境を暗示している。父の死後、スイスでの約 9 か月間の海外体験を経て帰国した 32 歳の Marian は、家庭の天使を理想とする当時の女性の枠から明らかに逸脱している。Frederick R. Karl は *George Eliot: A Biography*, 第 5 章のタイトルを ‘Limbo’ と称して当時の彼女の胸中を表現しているが、家庭という安住の場も無く、打ち込める対象も無い彼女もまた不安と焦りに燻っていたに違いない。Chapman を取り巻く複雑な人間関係、無名の只働きに近い労働条件等、問題山積だったにもかかわらず、まるで水を得た魚のような彼女の仕事ぶりが、就任当初は毎日のように、Bray たちに書簡で嬉々として報告され、遂に天職に巡り合えたかのような充実感さえ感じられる。

III

Chapman は、知性や文学的センスの欠如のみならず経営方針もずさんで、編集のパートナーとして負の存在だったという見方が大方だが、私は、逆説的だが負の存在ゆえの彼の意義を考えたい。もし、彼が有能な編集者で、あらゆる業務に関して有無を言わさぬ采配を揮い、Marian は単なる従属的な雑用係にすぎなかったなら、どうだったろうか。頼りない彼に代わって、止むなく編集の殆どの業務を一手に引き受けることもなかっただろう。逆に言えば、彼女の才能と誠実さを高く評価する Chapman の信頼のもとで、ある程度自由に WR を創り上げる喜びを享受出来たのではない

だろう。当時ジャーナリズムで働く女性は結構多かったが、その殆どが夫であるジャーナリストの補助的役割に黙従するのが通例であった。⁸ そのような中で、裏方とはいえ由緒ある季刊誌の復刊に主力として参与し、実力を発揮出来たのは、一面、編集長としての Chapman の非才ゆえではないだろうか。

さて、Marian が実質上の編集長として腕を揮ったのは、WR, *NEW SERIES* の 1852 年 1 月号から 1854 年 1 月号までの計 9 号である。1、4、7、10 月に出版する季刊誌として、形態は A5 判サイズ、毎号大体 320 頁内外の大部のものである。構成は、内外の歴史・科学・哲学・海外事情・宗教・政治・現代文芸(新刊書評)を扱う 12~13 の Article より成る。一例として、1852 年 1 月号の内容を具体的に見てみると、

- Art. I Representative Reform (W. J. Fox)
- Art. II Shell Fish: Their Ways and Work (E. Forbes)
- Art. III The Relation Between Employers and Employed (W. R. Creg)
- Art. IV Mary Stuart (J. A. Froude)
- Art. V The Latest Continental Theory of Legislation (F. W. Newman)
- Art. VI Julia von Krudener, as Coquette and Mystic (G. H. Lewes)
- Art. VII The Ethics of Christendom (J. Martineau)
- Art. VIII Political Questions and Parties in France
- Art. IX Contemporary Literature of England
- Art. X Contemporary Literature of America
- Art. XI Contemporary Literature of Germany
- Art. XII Contemporary Literature of France

といった line-up である。(括弧内は執筆者、但し全て無記名で発表)

中でも英国を主に、アメリカ・ドイツ・フランスの新刊書を紹介する Contemporary Literature(以下、CL と略記)は、WR, *NEW SERIES* の“New feature”として、Marian たちが特に力を入れた分野である。先ず CL section の冒頭に、旧号までの路線に代わる新たな目標を掲げており、新号にかけた意気込みが感じられる。

Under the conviction that brief and incidental literary notices, such as have been hitherto appended to the more important portion of the

“Westminster Review,” are of little value in a quarterly periodical, it has been determined to substitute for them a connected survey of the chief additions made to our literature during the preceding quarter. The foreign department of the Review, which, since the incorporation of the “Foreign Quarterly” with the “Westminster,” has been confined to notices of a few foreign publications, will also, in future, be conducted on a new plan. American, French, and German literature will be treated in separate articles of a like comprehensive character with the one on English literature.⁹

CL をこれまでの ‘brief and incidental literary notices’ という副次的な存在ではなく、季刊誌として価値ある記事にすべく強化する決意が明記される。具体的には、(1) 最近四半期に出版された文芸主要作品を comprehensive (広範) に扱うこと、(2) 海外(アメリカ・フランス・ドイツ)の文芸紹介にも同様に力を入れること、と内外ともに充実・拡大の方針を打ち出している。この傾向は *NEW SERIES*, VOL. V 以降一段と進み、より多数の出版物を網羅すべく、(1) 活字を小さくし、(2) 国別ではなく、6つの対象ジャンル(a. 神学・哲学・政治 b. 科学 c. 古典・文献学 d. 歴史・伝記・旅行記 e. 文学 f. 芸術)に分けることで、英・米・ヨーロッパの知の動向の体系的紹介を目指す、その結果、対象書籍数は飛躍的に増えている。

このように、article, review とともに *WR* の最大の目標は、多彩な分野における広範な啓蒙だった。当時の知識人の最も著しい特色は、関心の広さであり、特に6つの学問 文学・歴史・文献学・哲学・神学・その他人文学 に精通していたと言われている¹⁰ が、まさしくその知識人層の向学心に target を絞っている。また、新刊案内は書籍販売業も手懸けていた Chapman にとって、売り上げ促進の有効な宣伝になったのではないだろうか。

編集者としての Marian の役割は、(1) テーマと執筆者の選択への提言 (2) 校正 (3) 必要に応じて原稿の削除・加筆 (4) 印刷工程の監督、であり、¹¹ 執筆には基本的に参加していない。しかし、複数の担当者が執筆したと推定される CL section では彼女も例外的に執筆に関わっており、以下、具体例として *NEW SERIES*, VOL. I (1月号)の CL of England を概観してみたい。

この号では 42 頁(247–288 頁)を使い、合計 26 の新刊書を紹介してい

る。書評の対象作品ジャンルの内訳は、伝記 3、歴史 4、海外事情 7(インド、チベット、モンゴル、レバノン)、自然科学 3、民族学 1、神学 2、小説 3、随筆 1、寓話 1、詩 1 である。興味深いのは、現代の文艺批評のように対象が fiction 中心ではない点で、小説は section の最後に僅か 3 作が簡略に紹介されるだけで、影が薄い。代わって存在感があるのは、伝記と non-fiction の海外旅行記である。特に東洋(小アジア、中央アジア、タタール地方、インドなど)関連の書物が多く、中でも植民地インドでの現地人制圧の歴史、植民地化成功のための情報・提案・施策などが目立ち、当時の英国の、植民地・海外への関心の強さを反映している。また、西欧人にとって未知の地域への旅行記・探険記の多さも目を引く。国際化の激化につれて、一味違った新奇な場へ関心を向ける読者の趣向を考慮に入れてか、中央アジア、レバノン、アルバニア等、辺境の異国・異民族を紹介したものが多い。更に号を追うにつれて、オーストラリア、南米アルゼンチン、タスマニア、ナタルといった遠隔地が舞台となり、通商や移民に世界各地へと行動半径を拡げていく時代背景がしのばれる。

ところで、同号 CL の冒頭に取り上げた Carlyle 著、*Life of Sterling* の書評は、その style から、また 1851 年 10 月 22 日付けの Bray 一家に宛てた書簡の 'I have been reading Carlyle's *Life of Sterling* with great pleasure—not for its presentation of Sterling but of Carlyle. There are racy bits of description in his best manner and exquisite touches of feeling . . .' (*Letters*, I.370) といった内容が、書評の主旨に殆ど一致する点から、Marian が執筆したと断定されている。¹² CL section の冒頭に掲げ、新企画に臨む彼女の熱意が感じられるこの書評は、編集者時代に彼女が執筆した唯一のまとまった article と言われているので、以下検討していきたい。

伝記は CL での新刊紹介の中でも目立って数が多く、当時の出版界での流行部門だったことが分かる。偉人伝の人気は、出世を希求する Victoria 朝の精神風土を反映してのことだろう。しかし多くの伝記が手紙・日記からの無味乾燥な事実の羅列にすぎず、理想的な伝記は少なかったようだ。そういう現状に不満を抱く Marian は伝記作家に次のように望む。

We have often wished that genius would incline itself more frequently to the task of the biographer,—that when some great or good personage dies, instead of the dreary three or five volumed compilations of letter, and diary, and detail, little to the purpose, . . . we could have a real 'Life', setting forth

briefly and vividly the man's inward and outward struggles, aims, and achievements, so as to make clear the meaning which his experience has for his fellows.¹³

読者が読みたいのは、美点ばかりを溢れるほど書き尽くしたのではなく、偉業を達成する過程で苦闘するあるがままの生き方を鮮明・簡潔に書いたものだ、と訴える。粉飾したきれいごとではなく目標に向ってもがき苦しむ真の姿をこそ追求すべきだとする realism、偉人の体験を読むことによって他者の苦悩への共感を願う読者教化という目的には、Eliot の創作理念の基本が既に見られる。

完璧な伝記とは、(1) 対象との個人的な親密さ (2) 熟知した対象の美と内奥を見極める poetic nature (3) 個性を把握し、生き生きと表現する artistic power、の三条件を併せ持つものだと彼女は主張し、Carlyle による当書は、それらを備えた稀な例だと高く評価する。*Life of Sterling* には、その4年前に出版された Julius C. Hare による Sterling 伝¹⁴ の内容の不備に憤りを感じた Carlyle が、誤解を解き真の姿を伝えるために親友の立場から書いたという経緯がある。聖職者から文筆家へと転向した Sterling に関する二書の決定的に異なる見解を比較検討し、“I should say artist, not saint, was the real bent of his being.” (WR, Vol. 57, p. 250) と断言して Sterling の本質を鋭く見抜いた Carlyle の優れた洞察力を実証してみせる。

当書はそもそもの執筆動機からして Carlyle の個性を濃厚に反映しているが、Marian はその点を大いに楽しみ、何でもなし episode に溢れる “picturesqueness and interest under the rich lights of Carlyle's mind” (WR. Vol. 57, p. 249) を称え、当書の魅力は、伝記の主体たる Sterling 以上に、著者 Carlyle の人間性が垣間見られることだと強調する。同様に、我々もこの書評から評者 Marian の一面が窺われるという興味深さを享受出来る。当書評は、段落の区切りの無い、息の長い文章がぎっしりと続く密度の高さが特長だ。この改行の極端に少ない表現は、*Coventry Herald* に発表した彼女の初期の essay 群から後期小説まで一貫して頻出する style である。しかし、小説で時折感じる重苦しい冗長さはここには無く、一気に畳みかけるような迫力で論旨が展開する。この書評には Carlyle の伝記作法に共感し、自己と波長の合う資質を見ている点など、文学信条・創作の方法・価値観が窺われるが、それ以外にも、適切な引用で論旨を進める力強さ、随所に見られる低俗なものへの辛辣な攻撃など、当時の彼女の energetic で aggres-

sive な姿勢が感じられて興味深い。

とりわけ印象的なのは、齒に衣着せず見解を表現する率直さであろう。例えば、会話や雄弁の才を世間から称賛されているようだが、作品から窺うところ、Sterling には table-talk や ana(ゴシップ集)の類の機知や修辞力すら無い、と痛烈である。Archdeacon である Hare に対しても、Sterling の後半生における精神的軌跡の追究が不完全だと指摘し、伝記としての致命的欠陥を明言してはばからない。自由に発言出来る匿名の強みにもよるのだろうが、名声や社会的地位等に媚びたり萎縮することは一切なく、対象そのものの本質を見据えて評価する厳しさが、若さ独特の不敵さを感じさせる。

妥協を許さぬ厳正さは、編集の姿勢にも共通している。彼女は執筆者の選抜に最も苦勞したようだ。時代を代表する高級季刊誌を目指す高い志のもとで、執筆陣に一流の著述家を求めている。例えば、先述した VOL. I の執筆者の陣容を見ても、“the most talented authors of the day”¹⁵ を揃えていることが分かるが、常にライヴァル他社の動向に目を配り、魅力的な季刊誌を目指す Marian の要求は非常に厳しい。充実し新鮮な執筆陣の強化への渴望と、実際に筆を奮う寄稿者のしがらみとの葛藤、organizer にすぎず思い通りの編集が出来ない限界が、この頃の書簡に見られる彼女の苦惱である。

I have been ready to tear my hair with disappointment about the next number of th *W[estminster] R[evue]* . . . The English Contemporary Literature is worse than ever and the article on *Ruth* and *Vilette* is unsatisfactory. . . . In short I am a miserable Editor. (*Letters*, II, 93)

しかし、大筋で見れば、Marian は、質の高い内容の実現に向けて極力意志を通したのではないだろうか。例えば、執筆を希望する Chapman に対し、教養・文章表現力ともに *WR* に掲載するには力量不足と判断すると、断固反対しているし、骨相学を援用しての冗長で論点の不完全な Combe の article, ‘Criminal Legislation and Prison Discipline’ に対しても、*WR* の経済的支援者であり寄稿の常連である彼の面子に苦慮しつつも、少なくとも 2 度書き直しの上、96 頁から 36 頁へと大幅な削除を断行した¹⁶ が、それでもなお不満な彼女は極力掲載を延期した。結局この article は彼女の在職中には日の目を見ることはなく、1854 年 4 月に掲載されている。

このように寄稿者と主題を厳選した Marian の努力は、直ちに認められ、高く評価される。

It is a matter of general remark, that *the WR*, since it passed into MR. CHAPMAN's hands, has recovered the former importance it acquired when under the editorship of JOHN STUART MILL. It is now a Review that people talk about, ask for at the clubs, and read with respect. The variety and general excellence of its articles are not surpassed by any Review. (*Letters*, II.55)

上記の引用は、G. H. Lewes が 1852 年 10 月 2 日発行の *Leader* にて 2 頁を使って、復刊後の *WR* のレベルの向上、特に寄稿文の優れた多彩さを書いた記事の一部だが、最大級の賛辞といってもよいだろう。ちなみに、この頃二人はまだ特に親密ではなく、この称賛に個人的感情の反映は無いと思われる。

Marian の脳裏を常に占めていたのは *WR* の充実である。出来栄については、逐一手紙で Bray や Sara に一喜一憂ぶりを伝え、“On the whole, our number is very superior even in attractiveness to either *the Edinburgh* or *the Quarterly*” (*Letters*, II. 6) と喜んだり、“I have noticed the advertisement of *the B[ritish] Q[uarternly]* this morning. Its list of subject is excellent. They have one subject of which I am jealous—‘Pre-Raphaelism in Painting and Literature’. We have no good writer on such subjects on our staff.” (*Letters*, II. 48) と悔しがったりしている。このような熾烈な競争社会に身を置いた結果、彼女はジャーナリズム業界の内情を肌で熟知したと思われる。

自らの手で完成した *WR* への世間の反応については、反響の大きさに驚くと同時に、“it is amusing enough to compare the diverse and contradictory opinions given by people and journals on every single article in *the Review*.” (*Letters*, II. 4) と、寄せられた種々に異なる意見・評価への興味が綴られる。一つの記事に対して、雑多で異なる見解が生まれる現実の複雑さを身をもって学んだに違いない。このような体験の積み重ねによって多様な視点による現実洞察や正しい判断力が育成され、全てが相対性の羅列とも言うべき *Middlemarch* の、あの驚くほど多様性に満ちた世界の構築を可能にしたのではないだろうか。

一貫して無名の存在で通した彼女を、Rosemary Ashton は “the most distinguished and the most reticent editor in the history of the journal”¹⁷ と称えて

いる。事実、彼女が編集した9号のWRを前にし、これだけのものが彼女の双肩にかかっていたのかと思うと、質量ともに重厚なレベルの高さに圧倒される。ライヴアル誌の次号の宣伝に衝撃を受けると休暇の旅先でも対策を練るなど、常に充実を目指した努力の結果、NEW SERIESはmajor journalとして世間から認められるようになる。

しかし1部5s、650部発行では経営が順調なはずもない。更に、書籍販売部門の経営と混同するChapmanのルーズな浪費、復刊当時の熱烈な支援者Lombeの死による資金難から、経営が行き詰まったこともあり、1854年1月号を最後に、WRの編集から撤退することになる。

IV

2年半の編集業がMarianに及ぼした影響は、先ず第一に、ジャーナリズムの裏事情に精通したことだろう。出版者、寄稿者、編集者の関係、また出版業の経営、販売と流通の複雑なメカニズム、読者の反応の多彩さなどを現場で直接体得したことは、その後の執筆活動に多大の影響を与えたに違いない。19世紀には文壇とジャーナリズムが強く密着しており、¹⁸DickensやThackerayを代表に両ジャンルで活躍する文人は多かった。殊に彼女が担当した新刊書の幅広い紹介は、世界の読書傾向や最新の時代感覚の把握に最適であり、実作の際、有益な参考になったのではないだろうか。

第二に、当時のどんなに優れた男性にも負けない教養と視野の広さを身につけたことである。WRで彼女たちが何よりも力を入れたのは、広範な分野における上質の知と芸術の紹介である。このために優秀な執筆者獲得に向けて出来る限りの努力をしているが、常連の執筆者以外にも、Dickens, Carlyle, Mill等、時代の指導者的立場の人々と交わる機会を得て、多彩な思想や文化にdirectに触れた体験は大きな収穫だったに違いない。また、校正には原稿の精読 思想や文章表現の精査 が必須であり、多岐にわたるジャンルの寄稿文の精読は、学際的な博識と同時にバランスの取れた判断力を育んだことだろう。特にCLでは、英・米・欧州大陸の多分野の新刊書を多数紹介することを特色している。国別でまとめた1853年10月までの8号のCLで取り上げた英国の新刊が279冊、米国のものが111冊、ドイツのものが189冊あり、国別を止めた新方式による1854年1月号では約140冊を紹介している。それに未勘定のフランスの新刊書や、article

で言及された書籍を含めると、Marian 編集による *NEW SERIES*、全 9 号で取り上げた書物の数は約 1,000 冊に及ぶと言われている。¹⁹ これら全てを読破したかどうか、定かではないが、しょっちゅう眼精疲労を訴えているところからも、かなりの読書量が推察される。最新の世界の文芸と思想を紹介し、当時の英国読者の視野の拡大と啓蒙に貢献したことは、彼女たちの大きな功績であろう。同時に彼女自身、膨大な知の流れの中に身を置くことにより、広大な perspective と時代感覚、文学的センスを会得し、いわば働きながら、素材・表現技術・思想等、創作に必要な素養を培い、無意識のうちに自己の文学信条を築いていったことは想像に難くない。

また、この時期は、昼間の編集業以外にも、Chapman の催す *soirée*、オペラ、観劇など、仕事の後の私生活も充実していた。特に、Owen, Marx, Nightingale など、内外の名士たちとの出会いが頻繁であった *soirée* に関しては、Sara たちに報告する書簡にも“brilliant”とか“agreeable”といった形容が並び、多彩な分野で活躍する人々との exciting な会話を楽しんでいる。この時の専門家や学者たちから得た耳学問だけでも大きな収穫であり、後の創作に結晶したものもあったのではないだろうか。

芸術家として大成するための必須要素として、Cross が挙げた「文学的視野の広さ」を考える時、まことにこれ以上の修業の場があるだろうか。ここで育まれた知性と表現力、豊かな感性を駆使して、1854 年 10 月からは今度は *WR* と *Leader* の寄稿者として舌鋒鋭く優れた評論を精力的に発表していく。更に、Lewes に勧められ 1856 年 9 月より執筆した“The Sad Fortunes of the Rev. Amos Barton”に始まる創作活動では、彼女の才能を育てるべく協力を惜しまなかった G. H. Lewes と、誠実で献身的な出版者 John Blackwood に支えられて、小説家として大成していくのである。

注

1. Nigel Cross, *The Common Writer: Life in Nineteenth-Century Grub Street* (Cambridge University Press, 1985) p. 167.
2. *Ibid.*, p. 203.
3. Kathleen Adams, *Those of Us Who Loved Her: The Men in George Eliot's Life* (The George Eliot Fellowship, 1980) p. 51.
4. この定収入の額については、年額 90~120 ポンドまで諸説あるが、本論では伯母よりの遺産相続を考慮した Laski 説を採った。Marghanita Laski, *George Eliot and her world* (Thames and Hudson, 1973) p. 33. 90 ポンド説として、川本静子

- 『G. エリオット 他者との絆を求めて』(冬樹社、1980)p. 36. Kathleen Adams, *George Eliot* (The Pitkin Guide, 2002) p. 9. 100 ポンド説として、Frederick R. Karl, *George Eliot: A Biography* (W. W. Norton, 1995) p. 100 がある。
5. J. P. ブラウン著、松村昌家訳『19世紀イギリス小説と社会事情』(英宝社、1987) p. 42.
 6. R. D. オールティック著、要田圭治・大嶋浩・田中孝信訳『ヴィクトリア朝の人と思想』(音羽書房鶴見書店、1998)p. 77.
 7. A. S. Byatt and Nicholas Warren (ed.), *George Eliot: Selected Essays, Poems and Other Writings* (Penguin Books, 1990) p. 4.
 8. Barbara Onslow, *Women of the Press in Nineteenth-Century Britain* (Macmillan, 2000) p. 1.
 9. *The Westminster Review* Vol. 57 (1852. Schmidt Periodicals, 1989) p. 247.
 10. 『ヴィクトリア朝の人と思想』 p. 295.
 11. Gordon S. Haight, *George Eliot: A Biography* (Oxford University Press, 1968) p. 98.
 12. Thomas Pinney (ed.). *Essays of George Eliot* (Routledge and Kegan Paul, 1963) p. 46.
 13. *The Westminster Review*, Vol. 57, p. 249.
 14. *Essays and Tales by John Sterling*, 2 vols., Collected and edited, with a Memoir of His Life, by Julias Charles Hare (1848).
 15. Rosemary Ashton, *George Eliot: A Life* (Penguin Books, 1996) p. 92.
 16. Haight, p. 144.
 17. Ashton, p. 81.
 18. Onslow, p. 200.
 19. Karl, p. 131.

after by some families, and further, that applicants sometimes stated their single status—information which would otherwise have been disadvantageous in the moral climate of the time. For some, single wet nurses were preferable to their married counterparts because they did not disrupt the patriarchal order, which demanded that wives stay at home to do only housework. In their position outside the patriarchal order of society because they were not wives, unmarried wet nurses could be used as commodities free from the risk of provoking patriarchy. Thus, while wet nurses could form the subject matter of discussion, they had no recourse to state their own thoughts and feelings. This would all change, however, at the end of the 19th century, when an unmarried wet nurse finally got up to declare that she, though regarded as outside the patriarchal order and not as a mother at all by middle-class values, is certainly a mother for her own child. In George Moore's *Esther Waters* an unmarried wet nurse shows that she is more motherly than the middle-class mother by whom she is employed. Esther criticizes her employer for not feeding her baby herself. With this novel a wet nurse could finally refute all the middle-class prejudices against wet nurses and show the respectability of the single mother.

George Eliot—her literary apprenticeship

Shigeiko TOMITA

In *The Cambridge Bibliography of English Literature*, the total number of female writers in 19th Century England is estimated at around 4,000. However, of this total, only a select few, namely Austen, Charlotte Brontë, Gaskell and George Eliot are still remembered today. While most disappeared from view due to their works' poor quality, Nigel Cross suggests that the narrow literary horizons of women at the time, caused by lack of education, opportunity and property, was also a major factor making it difficult to achieve artistic distinction. As compared with them, Eliot found her path to the literary world facilitated via fortunate opportunities.

The aim of this paper is to examine the formative period prior to her writing

career and specifically, how she accumulated her wealth of knowledge and gained a wider view on literature, through studying her biographies, letters, journal and the volumes of *The Westminster Review* which she edited.

In view of their important role in enhancing her intellectual development, I will focus on (1) Charles Bray and his liberalist circle and (2) the Editorship of *The Westminster Review, NEW SERIES*, with which she was involved from 1852–54. I would like to pay special attention to the Contemporary Literature section which she strived to make a feature of *The Westminster Review*. This focus is in order to ascertain how her experience as editor of this journal rendered her with intellectual groundwork necessary for her successful literary career.